

## 編集後記

多根総合病院 副院長 小川 竜介

多根総合病院医学雑誌は記念すべき第10巻となり、巻頭言を多根理事長にお願いしました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対するKHSグループの1年間の対応が簡潔にまとめられ、「タネイズム」について言及されています。

「タネイズム」を入職後20年になる私なりに考えてみると、2000年に広島病院から異動する際、当時の脳神経外科は（今では知る人も少なくなりましたが）鈴木先生が部長でした。うまく溶け込めるのか着任前に心配しましたが、鈴木部長をはじめとして大阪市大出身のスタッフに温かく迎え入れられました。2003年には大学（大阪医大）病院に戻って病院機能評価受審に携わりましたが、多根時代の人脈を活かして（既に認証取得していた）総合病院の看護部にお世話になりました（故原田看護部長の数々の助言なくしては大阪医大病院の一発合格はなかったと思います）。「タネイズム」を言葉で表現することは難しいのですが、きつこう会70年の歴史の中で育まれた職員気質（スピリット）だと思います。上述のような職場カラーの温かさ、助け合いの精神であったり、新しい先進医療を積極的に取り入れる姿勢であったり、多根病院ではなく「多根さん」と患者家族から呼んでもらえる親しまれ様であったり、職員の様々な側面を肯定的に表現した言葉だと考えます。COVID-19という未曾有の危機に際しては「1つにまとまろう」「中核病院として地域のニーズに応えよう」という対応に繋がっています。しかし、少し大げさな表現で言えば無形文化のような存在なので、今後も守り伝えていく必要があります。組織が大きくなると「タネイズム」が薄まって失われてしまうことを心配します。積極的に「タネイズム」を職員に広く知ってもらう機会を設け、各部門が「タネイズム」を体現する人材を育てることが大切です。その機会の1つとして、KHS学術集会と忘年会（亀フェス）が重要な役割を果たしていましたが、COVID-19の影響で開催できなくなりました。コロナ禍が収束して学術集会と忘年会を再開できる状況になるまでは、本誌も微力ながら「タネイズム」の体現に学術的側面から貢献していきたいと考えています。

第10巻は原著、症例報告、短報、看護研究の区分で計12編が掲載され、いずれも専門性が高い内容です。一部は、2019年のKHS学術集会の発表に対して事務局より執筆を依頼したものです。各論文にはeditorial commentsを添え、内容理解を深める一助としましたので、本編とともに末尾のコメントも是非ご一読ください。一部は院外の先生にお願いしました。多忙な中をコメント執筆に時間を割いていただいた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。

第9巻以降はプリント版以外に、フルカラーの写真/図表を掲載した電子版（PDFファイル形式）もKHSホームページからダウンロードできます。また、第1巻以降のすべての論文もホームページから電子版として利用できるようになりました。なお、第9巻まで掲載されていた業績集は内容がKHS年報と重複するため、今回から割愛することにしました。今後は純粋な学術誌として刊行し、少しでも学術性を高めていきたいと考えています。他にもご要望がございましたら編集部までお寄せください。

最後になりますが、皆様のお陰で本誌は第10巻を迎えました。1つの論文には着想、データ収集、統計処理、執筆まで著者を含む多数の人が関与しています。さらに投稿後の校正（revision）は気が重い作業と感じられるかもしれませんが、論文を仕上げる上で重要な工程です。辛口の指摘もありますが、査読者（reviewer）は論文の欠点を探すのではなく、こうすればもっと良い論文になるというポジティブな視点からコメントしていることをご理解ください。完成して掲載された論文は関わった方々の努力の賜物です。第10巻までの論文に関わったすべての方々に編集委員と事務局を代表して感謝申し上げます。そして、これからも皆様の論文投稿をお待ちしています。前編集責任者の渡瀬誠先生は最後（第7巻）の編集後記で「医師はとかく統計を重んじた論文作成に終始しがちであるが、様々な職種でneues（ノイエス：ドイツ語で新しいもの）は存在し、統計処理しようのないものがあり、本雑誌はそのような部分にも光を当てたい」と述べられています。今後もこの方針を堅持することを記し、第7巻までを担当された渡瀬先生に謝意を表して編集後記を締めくくります。